

特別支援学級部会

<県研究主題>

一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

提案 1

提案者 吉本幸雄(横浜地区)

<研究主題>

小中連携を活用した児童生徒の支援
～中学校生活に対する課題解決に向けて～

1. 提案内容

(1) 学校の概要

横浜市立小中一貫校霧が丘小中学校は一つの敷地内に小学校と中学校があり、安全に行き来できる環境にある。月1回程度、小学校と中学校の交流授業がなされている。交流授業の打ち合わせは、会議日を設定したり、必要に応じて連絡を取り合ったりして事前、事後におこなっている。そのなかでそれぞれの児童生徒の実態について共通理解をはかっている。

(2) 実践

児童(Aさん)の実態を踏まえて、小中学校の教員が中学校生活で課題となることを話し合い、6年生の12月より以下の8項目について優先的に取り組んでいくこととした。

- ①教室移動
- ②給食から弁当へ
- ③標準服・体操着の着替え
- ④異性との距離感
- ⑤中学での学習・授業形態
- ⑥保護者に伝える情報(予定表)
- ⑦トイレのつかい方
- ⑧ひも靴の脱ぎ履き

小学校の卒業式が近づくにつれてAさんは中学校の生活に対する意欲がわき、小学校での行動もはやく指示理解がよりスムーズになった。また、身体バランスをとるコツが分かり、階段や段差もあまり気にしないで行動できるようになった。

中学校入学以降も、小学校からの評価のサイン「はなまる」「かっこいい」「えらい」を本人の状態や周囲の状態に合わせて引き続き使っている。入学前からの取り組みにより、中学校生活でのトラブルや大きな困難は見られず「土・日曜日の朝にも学校へ行きたい!」と保護者に訴えるほど学校生活を楽しく過ごしている。

2. 協議内容

—参考にした点—

- ・小学校段階から学卒後の将来を見据えた計画的な指導、連携がなされていた。
- ・年間40回近くの小中合同の授業があり、まさに小中連携がなされていた。
- ・個別支援学級での取り組みをとおして、中学校の学級経営にユニバーサルデザインが取り入れられるようになってきた。
- ・個別支援学級の教員が交流級の学活や道徳を担当していくことで、支援級と交流級の生徒が学び合う関係が自然につくられている。

- ・中学入学に当たって、保護者の不安に対する対応がすばらしい。
- ・小学校在学時から保護者との教育相談をおこない、接続のための手立てを計画することで保護者の不安感をやわらげ、一つひとつ信頼を得ていた。
- ・保護者との信頼関係が育まれることで、学校と家庭で取り組みを継続しておこなうことができた。
- ・学校側から「～のようにします」のスタイルよりも、保護者の不安を受け止めてから指導をしていくという流れになっていた。

—課題点、改善案、自校での実践—

- ・霧が丘小中学校の場合は小1中1の連携であるが、複数の小学校から中学校に入学してくる場合は打ち合わせの場設定が難しい。
- ・支援学校の小学部から中学校へ入学するケースでは、接続に向けて連携していくことがあまり丁寧にはできていない現状がある。そうした場合、保護者から不満が出ることもある。
- ・自分の学校のテリトリー外で実践するために、時間をつくり出すのが難しい。一貫校以外ではなかなかできないのではないかな。
- ・教員間の情報交換はできるようになってきたが、「体験授業に来てください。」という呼びかけはしているが、保護者や生徒との情報交換がなかなかすすまない。
- ・事前交流の日や見学を自由にとしているが、各校での日程調整が難しい。
- ・年度末の休日などに1日、保護者や小学校の教員と話す程度の連携をしている。
- ・小中連携は行事をとおしたゆるい取り組みから、また保護者の要望に応じるかたちですすめている。
- ・小⇄中の距離があって、生徒が事前に通って活動していくのが難しい（この場合の距離は物理的距離）。
- ・重度の生徒の給食交流については、時間内に食べられない場合は支援級で食べるなど、目標値を生徒に合わせて設定していく。
- ・環境が変わることで子ども自身も変化が起きる。予想していなかったことが起こって当たり前と考えるのぞみたい。

3. 指導助言

小中連携についての成果や問題点など、現状を一番よく知っているのは現場の教員。

課題はいつでもどこでもあるものだが、成果が上がっていることが素晴らしい。霧が丘小中学校では9年間（小6年、中3年）が4、3、2年につながれている（小学部1～4年…夢と元気）、連携部5～7年…仲間と自立/自律、中学部8・9年…貢献と発信）。一貫校として環境が整えられているだけでなく、そこに職員の小中連携に向けた意欲が原動力になっていることが感じられた。

連携のポイントは子どもによって異なるが、一人ひとりを大切に、違いを考慮して支援していくことが重要である。中学校入学の4ヵ月前から連携に向けて支援している。保護者と一緒に生徒の様子を見ていくことで、保護者にも安心感を与えている。

<研究主題>

コミュニケーション能力の向上を目指して
～個々の自立活動の実践～

1. 提案内容

特別支援学級の生徒は、日常生活や普段の遊びの中で、自分の気持ちや言いたいことを表現できない。秦野市特別支援研究部会では「自立活動」の5つの内容の中から「コミュニケーション」「人間関係の形成」にテーマを絞り、平成25年度は「個々の自立活動の実践」とサブテーマを設定し、各校から1名を抽出して特性に即した指導の手立てを比較検討していくこととした。

(1) 大根中学校での実践

対象生徒の行動分析を（原因やきっかけ・行動・トラブルの対象・心理的背景）の視点で行う。

① 抽出生徒の課題

- ・予想外のことが自分の世界に入り込んだり、自分のペースが狂わされたりすると、相手に対して暴言を吐いたり暴力をふるったり、物を隠したりする。
- ・友達や先生からの注意を受容できず、注意されたことにのみ反発し行動がさらに激しくなったり、持続したりすることがある。
- ・自分の行為を振り返ることができず、自分の言葉で相手を傷つけていることや不快にさせていることに気づいていない。

② 指導目標

- ・自分のペースに執着し、自分のやりたいことに強いこだわりを持つことへの緩和。
- ・自分が発する「言葉」を相手がどのように受け止めるかについての意識。
- ・指導されたことの内容についての理解。

指導目標 友だちと関わるときに、「ふわっと言葉」を使うことができる

③ 支援の手立て

- ・言われると嬉しくなる言葉を「ふわっと言葉」いやだなと思う言葉を「ちくっと言葉」とし、「ふわっと言葉」を視覚的に確認できる掲示物を作る。
- ・カードを使い「ありがとう」などの言葉を友達と声かけの練習。「いい感じな気持ち」体験。
- ・気持ちを表す言葉をみんなで出し合い書く。その気持ちを味わった時の出来事を順番に発表する（マイエピソード）。
- ・「ふわっとさん」「ちくっとさん」「おどおどさん」3つの話し方を知る。
- ・「ふわっとさんになろう」セリフを考えてみる。
- ・絵カードと気持ちカードのマッチング。
- ・ふわっとトークをしよう～インタビューゲーム。ロールプレイング。
- ・ふわっとすごろく～学習の総復習としてルールを学ぶ。

(日常的支援：注意するのは先生・ほめる・気持ちの言語化)

④成果と課題

本人に関する情報を整理し、行動の観察から分析まできめ細かく行うことができた。また行動の心理的背景に視点をあてることで、生徒の気持ちに寄り添った支援を行う手がかりを得ることができた。生徒の特性や好みに応じた支援ツールの活用も意欲や望ましい行動の持続に大変有効であった。

成功体験は自尊心を高め、教員や友だちから肯定的に評価されることで他人との関わりに対して意欲的になり、コミュニケーション能力を伸ばすための鍵となる。

これらの成果を踏まえて、多くの場面で実践してみるよう促していくことが大切である。そのためには、交流級担任や家庭と情報を共有し、適切な行動が取れる機会を増やしていきけるよう環境を整えることが課題となる。併せて、私たち教師自身のコミュニケーション能力を高めていくことも課題となるであろう。

2. 協議内容

協議の柱「コミュニケーション能力の育成に向けた有効な取り組み」

(1) 参考にしたい点

- ・支援のツールが分かりやすく、五感で感じとれる授業づくり
- ・「注意するのは先生」教員がルールを作ることはとても良い。
- ・子どもとの信頼関係ができていて素晴らしい。子どもから言葉を引き出していた。
- ・声をかける時も、教員の表情、目が大切。支援教育の視点で全ての子を見ていた。
- ・言葉と意味の結びつきの指導は通常級でも応用できる。

(2) 課題・改善案・自校での実践等

- ・言葉が出ない自閉の生徒はソフトバレーを通じて相手を意識させる取り組みをした。
- ・子どもは「ちくっと言葉」の方が入りやすい。
- ・子ども同士だけだと誤解が生まれてしまうことも多い。間に入り「どんな気持ちだったのか」わかりやすく言葉を言い換えて説明する必要がある。

(3) 助言・まとめ

- ・**行動の裏にある思いを見取る**～行動の心理的背景。障害があっても感性は健常児と変わらない。むしろより敏感かも。子どもの行動の「本当はこうしたかった」という本人の気持ちに寄り添うことが大切。「わかってくれる」教員との安定した関係（信頼関係）により子どもは力を発揮していく。
- ・**自己肯定感**～良いところも欠点も含めてありのままの自分を受け入れる。あらゆる場面で困難を伴う子どもは成功体験が少なく自信をなくしている。成功体験を味わう工夫をしかける。そして、振り返りカードなどを用いて変化してきている自分を確認させる。同時に教員がほめる。それにより、より価値づけされる。
- ・**教師のコミュニケーション力**～コミュニケーション能力は教員と生徒間だけでなく集団の中で育まれるもの。教員は「つなぐ」役割を担う。子どもが育つ背景には様々な連携が不可欠である。

中学校の支援教育は、目の前の課題だけでなく、社会人になった時の姿を想像しての指導が必要である。自立し社会参加できる力を養う重要な時期であることをふまえて今後の指導に当たっていくことが大切である。